

内野熊一郎著「孟子—伊尹<sup>いじん</sup>—」新釈漢文大系、明治書院 1962年6月15日刊を読む

〈通釈 I〉

1. (孟子の語はなおつづく。)
2. 湯王は伊尹の賢人なることを聞いて、贈り物をもってこれを招聘させた。
3. すると伊尹は、無欲自得の様子で、人の思わくなど考えず言いたいことを言った。
4. 即ち、
  - (1) 『自分は、どうして、湯からの招聘の贈り物なんかのために、出仕することなどをなそうか。
  - (2) しはせぬ。
  - (3) 自分にとっては、どうして、田野の中において、耕作に従事しながら、堯舜の道を楽しむ、というよりまさることがあろうや。』と言って、出仕しなかった。
5. 湯王は三たび使者をやって招聘させた。
6. それで伊尹も、ついにならりと初志をひるがえして言うには、
  - (1) 『自分は田野の中におり、耕作に従いながら、堯舜の道を楽しもうよりは、湯王に仕えて、この君をして堯舜のような君にする方が、まさったことではなかろうか。
  - (2) またこの民を教え導いて、堯舜の民のようにする方が、よいのではあるまいか。
  - (3) 更に又、自分自身、親しく堯舜仁義の道が天下に行なわれるのを見る方が、よいのではあるまいか。
  - (4) そもそも天がこの世の中に人民を生ずるに当っては、先に事物の道理について知った者に、後から知る者を、教え覚らしめるようにし、先に人の道を覚った者に、後から覚る者を、教え覚らしめるようにするものであるが、自分は今日の生じた人民の中において、まず最も先に覚っている者である。
  - (5) それ故に自分は、まさにこの道即ち堯舜仁義の道をもって、この天の生じた天下の人民を、覚らそうとする者である。
  - (6) もし自分がこれを覚さないでは、誰が覚すことをなそうか。』と。
7. 伊尹は、天下の人民の匹夫匹婦のような賤しい者ただ一人でもが、堯舜のような仁政の恩沢を被らない者があるのを思うこと、あたかも自分自身がこれを推しころがして、溝の中へ突き入れたかのように、感じたのである。

8. その天下の重任を自分一人が背負って立つこと、このようであったのである。

9. それだから、湯王に就いて、これに説きすすめるに、暴虐な夏の桀王を伐ち、困しんでいる天下の人民を救うということをもつてしたのである。

P340 ~ 341

#### 〈通釈Ⅱ〉

1. (孟子の言はなおつづく。)

2. 自分はまだ一度として、自分をまげて人を正したという事は聞いた事がない。

3. まして自分はずかしめるような行ないをしながら天下を正す者があるなどとは、聞いた事もない。

4. 聖人の行ないというものは、時に応じて現われ方はいろいろちがって来るものであって、或は世を避けて隠遁し、或は近づいて仕官し、或はその国を去り、或はふみとどまって努力する、など、いろいろではあるが、つまる所は、自分の身を潔白に正しく保つ、ということなのである。

5. 自分は、伊尹が堯舜仁義の道をもって、湯王に仕官を求めたことは聞いているが、まだ料理などをもって仕官を求めたなどということは、聞いていない。

6. 書経の伊訓にも、『天の命を奉じて誅罰を加えるために攻伐を行なったのは、桀王の宮殿牧宮からである。自分(伊尹のこと)が湯王をたすけてこの事業をなすのには、その都毫から始めた。』と言っている」と。

#### 〈余説〉

1. 本章も、伊尹の人物を述べ、その自身を潔正し、義と道とに恪遵し、その正に非ざれば一介も与えず、受けず、天下の衆民を覚醒し、天下の危殆を救済しよう、という大悲願と勇猛心に蹶起した真面目を述べ、ひそかに孟子自身これに比せんとする心気躍動の大文章である。

2. 特に、「その義に非ざるや、その道に非ざるや、之を祿するに天下を以てするも、顧みざるなり。その義に非ざるや、その道に非ざるや、一介も以て人に与えず、人より取らず。」の如き文章は、まことに人生の聖典の言葉というべく、汚職収賄の現下世相に振りおろされた一大警策ともいえよう。

3. 更に襟を正して、一そう切なる共感をおぼえるのは、「天の此の民を生ずるや、先知をして後知を覚さしめ、先覚をして後覚を覚さしむ。予は天民の先覚者なり。予斯の道を以て斯の民を覚さんとす。予之を覚すに非ずして誰ぞや。」という大自省・大自覚・大信念である。

4. この潔身正己と不与不受を根柢とする大自覚と大信念、心ある人々に知了して貰いたいのである。

P342 ~ 343

〈通釈Ⅲ〉

1. (孟子がいうには、湯王を助けて桀を伐ち、民を塗炭の苦しみから救ったと言われる)
2. 伊尹は、次のように言っている。
3. 即ち
  - (1)『どの君に仕えたとして、仕えてはいけない君などは存在せず、皆わが君である。
  - (2)どの民を使ったとして、使ってはならない民のあるはずはなく、皆わが民である。』と。
4. かくて伊尹は、世の中がよく治まっている時も、勿論進んで立って政治をするし、乱れている時でも、やはり進んで立って事に当ろうとしたのである。
5. さらに又、伊尹がいうには、
  - (1)『天が万民を生ずるについては、先に知っている者をして後から知る者を教え覚すようにし、先に覚った者をして後から覚る者を教え覚すようにするものであるが、自分はまさに天の生ずる民の中で、まっ先に覚っている者である。
  - (2)故に自分は今ちょうど、堯舜仁義の道をもって、この民を覚そうとするのである。』と。
6. これをもって考えると、伊尹は、天下の民、それは匹夫匹婦のような賤しい者が、一人でも堯舜仁政の恩沢を身近に被らない者があるのを思うこと、あたかも自分がこの人たちを推しころがして溝の中におとし入れた如くに、つよく責任を感じたのである。
7. それは、堯舜仁義の道をもってその天下を導き覚すという先覚者としての重任が、自分の双肩にかかっていると、信じていたからである。

〈語釈〉

- 伊尹 はじめ有莘の野ゆうしんにおり、のち湯王の招きに応じ、湯王を助けて桀を伐ち、民を塗炭の苦しみから救った。
- 何事非君 どの人に事えるとして君でない人があろうか、どの人を君として仕えてもかまわないの意。
- 何使非民 どの民を使うとして民でないものがあろうか、どの民を使ってもかまわないの意。
- 治乱 世の治乱をいう。
- 先知 民よりもまっ先にその事実の当に然るべき所を論っている者をいう(朱子)。
- 先覚 民よりも先に道や教理の然る所以を悟っている者をいう。

○此道 堯舜の行なわれた仁義の道や教をいう。

○匹夫匹婦 一夫一婦の関係の者。中国では身分の賤しい者をいう。

○与被 あずかりこうむる。即ち身に直接に受けこうむること。万章篇上7章ではただ「被」だけになっている。意味はかわらぬ。

○沢 恩沢。

P349 ~ 350

#### <通釈IV>

1. 孟子の弟子の公孫丑が言った。

2. (1)「伊尹が『自分の君の太甲に道義にそむく行ないをさせる事はしのびない。』と言って、太甲を桐の地に移したところ、民は大いに悦んだ。

(2)その後、太甲があやまちを改め、賢明な人となったので、伊尹はまたこれを都へかへしたところ、民は大いに悦んだ。

(3)賢人が人臣であった場合、その君が賢明でなければ、本来これを他に移してもいいものでしょうか。」

3. 孟子が言う、「伊尹のように天下を救うことのみを思い、一片の私心もない者であってこそ、それは許されるので、伊尹のような公明な志の無い者がそんなことをすれば、それは君の位をうばうことになってしまう。」と。

#### <余説>

本章、「伊尹の志有らば則ち可なり。伊尹の志無くば則ち篡ふなり。」とは、よくぞ言ったものである。かかる孟子の思索と条理には、さすが慧才の閃きがあって、味わい深い。

P468 ~ 469

#### <コメント>

中国の古典、「四書(論語、大学、中庸、孟子)」の一つである「孟子」には、君子(人徳すぐれた人)になるための様々な教えが具体的に描かれていて参考になる。ここに書き抜いた、賢人として名高い「伊尹」の教えは、「孟子」の中で最も心ひかれる教えの一つ。是非、現代語だけでもOKなので、「孟子」にも親しんでいただきたい。

2023年3月26日(日)林明夫